

ビジュアル・ナラティブと支援

京都大学名誉教授・立命館大学 OIC 総合研究機構

やまだ ようこ

私たちは、日々の経験を有機的にむすびあわせ、意味づけながら生きている。ナラティブ（もの語り）とは、経験を生き生きとむすびあわせる行為をさす。同じような出来事でも、むすびかたでナラティブは変わり、意味も変わっていく。

事実は変えられないが、もの語りは変えられる。「子どものとき、なぜ母が虐待したのか？」母を憎んで問いつづけた中年女性は、「母も私が憎かったわけではなく、生活が苦しかったのかもしれない」と語るようになり、安らぎを得た。

ナラティブ・アプローチでは、従来の心理療法とは違い、過去の出来事の原因を追及し、過去と対決してトラウマの浄化をめざすのではない。ナラティブによる支援やケアとは、当事者が自分のもの語りに気づき、もの語りを変え、ものの見方を変えていく共同生成の作業を共に歩むことである。

医療現場では、忙しくて患者さんの話を聴く余裕がないと思われるかもしれない。しかし、時間の問題ではない。ある糖尿病の専門医は、特別に時間をとって熱心に話を聴き、患者さんのことは何でも知っていると思っておられた。ナラティブ論を知ってから、低血糖で緊急入院した患者さんに「何か好きなことはないの？」と質問を変えてみたという。すると今まで何も語らず無表情で指示にも従わなかった患者さんが「熱帯魚を飼っている」と初めて笑顔で話をはじめたという。「魚のためにも注射しなくては」と言うと、深くうなずいた。今までは「糖尿病患者」としてしか相手を見おらず、「運動は？」「食事は？」など疾患に関する質問しかしてこなかったことに気づいたと言われた。

患者さんは「疾患」のために生きるのではなく、患者さんの人生のなかに「病い」がある。ナラティブとは、ただ「もの語り」を聴く行為をさすのでは

ない。ナラティブ論の根底にある世界観「ものの見方」を変えることが必要である。

私は、ナラティブ論の基礎の上に「ビジュアル・ナラティブ」を提唱してきた。ビジュアル・ナラティブとは、視覚イメージとことばによって語る行為である。通常のナラティブは、二者関係の対話である。それに対して、ビジュアル・ナラティブでは、視覚イメージを媒介にした三項関係になる。患者さんと並ぶ関係で共に絵を見ながら語ってもらうと互いに気持ちも楽で、話も生き生きとはずむ。そして、ことばでは語れない感情や感覚も、イメージで共感的に伝えられる。

絵の上手、下手は問題ではない。ある患者さんは、白紙にただ緑の線を一本引いただけで、生き生きと語りだした。「小学校のとき、グリーンのはちまきやった。運動会で1等とったんや。うれしかった！」

絵は外在化して、自分で見ることができるのも利点である。ことばでは「未来は真っ暗、早く死にたい」と言った患者さんが、未来の絵では、暗闇ではなく、灰色の空の雲の影に太陽を描いた。多くの患者さんが自分の絵を見て、にっこりする。過去は変えられないが、未来は変えられる。自分の未来のイメージが現在の自分を励ましてくれるのである。

ビジュアル・ナラティブは医療者の研修やワークショップにも役立つ。具体的な事例をもとに、ビジュアル・ナラティブのおもしろさを実感いただきながら、ケアと支援の方法について考えてみたい。

参考文献

- やまだようこ『ナラティブ研究—語りの共同生成』新曜社。
やまだようこ（編）ビジュアル・ナラティブ特集『N: ナラティブとケア 9号』遠見書房